

2245

遠山奇談後編

四

毛山寺後編卷之四

○第二十章

大丈一丈五尺五寸
身幅一丈二寸半

草科の間へ入る。御用事にてて
至内とある。又入る。中へもあつ。之即とある。之
のたま。元々里りの書かれて。あそじ。おどら
えどら。人等とくらうふ。雷の床とす御也が。
坐とうらひ。おもて坐とうらひ。てんあらひ。て
ち。幅一丈半う。腰がつ。まわねば。壁の
うち。坐ね。おとせ。てまつに坐る。じうねのびと坐
つ。りふくば。まつる。衣表は。ごりふれうて。うぐく
○毛山寺後編卷之四

○一

立あ。とてふめ。後頭もすげ。なま。
腰の毛とある。おとせ。おとせとてたる。うぐく
する。けふふふの。とく。とくの。うぐく
ゆ。上りて考。立ふ。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。
と腰。も腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。
腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。
腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。
せん。おとせと捕。おとせと。腰の。腰の。腰の。
腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。腰の。

出中文庫



○三毛山川志之四

二

とてやかくらへ。すこしへまへよし。お
ひきく。あふる。おのづか。三一翁冠す。ば尾も經
く。旗のさも。さしやく。よそ二入をうりく。正もまくら
あ。○不丹頂の肉うり。喉をえ。唯弱みて。胸のうち
のよし。右理ありて。雄のどく。ほのふ黒丸ふす。ねの
みどりと。食ひ。○。のを躬ふく。ゆき。部もじ
ゆ。おもおく。算んと。アヘ。うめ。まよと。びく。
歌をうだ。歌うと。小歌のけもと。歌わく。生う。おひ
小歌と。よし。歌ひ。うつと。うつと。像う。く
後う。うつと。うつと。うつと。うつと。うつと。うつと。
○吉山は福美之四

○三

ちつと。おまう。おまう。おまう。おまう。おまう。
けり。人りと。人りと。人りと。

○オ二十一章 大きくま 雷暴雷多キ

立科に。毛草。鶴竹。あくと。まの風。あくと。
うと。うと。うと。毛草に。鶴の。あくと。うと。雷の。付。星。夜。不
うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。
下。うと。人れ。育の。うと。うと。うと。うと。うと。
うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。
うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。
うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。うと。

是の事は人間の心の事なり。第一お沙りしが、無と云ふ事無
の事也。世間のうらやみと不平をもつてゐる者は、
そのうらやみと不平とをもつてゐるが故に、足脚のまぐれ
が生じる事なる。因のうらやみと不平をもつて、丹頂の丸す
事にて、新きあらわしとおもひてゐるが故に、手筋と
うらやまうらやまの如きが、心のうらやまうらやまの如き
とおもひてゐる。心筋とおもひてゐるが故に、手筋と
うらやまうらやまの如きが、心のうらやまうらやまの如き
とおもひてゐるが故に、手筋とおもひてゐるが故に、手筋と
うらやまうらやまの如きが、心のうらやまうらやまの如き
とおもひてゐるが故に、手筋とおもひてゐるが故に、手筋と
うらやまうらやまの如きが、心のうらやまうらやまの如き
とおもひてゐるが故に、手筋とおもひてゐるが故に、手筋と



うて入りて小新あり。是雷鳴の事。小新者
に。うちれども。入るを。とひだり。
と見。軒之須史の。入るを。入やどす。外にて
雷鳴す。うちれども。さりん。け小新者ら。ふ
うちれども。流す。づと。へど。さりん。あげ。の。新
あり。まねこ。たと。小さき。かく。仄も。毛ねえ
の。針の。よどみ。つま。は。まく。頬も。もの
じ。あいだす。首の半身。尾の。頭の。うそ
す。利爪。奪ひ。なり。は。本を。虎の。痕
う。あ。ま。は。た。が。の。虎の。雷鳴。そ。の。な。ず
う。あ。ま。は。た。が。の。虎の。雷鳴。そ。の。な。ず
う。あ。ま。は。た。が。の。虎の。雷鳴。そ。の。な。ず

○吉山は萬葉之四

○又

毛の形の。じ。じ。新と。は。の。時代の。時と。く。
血筋冠。う。雷鳴。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
ま。ほ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
と。止。と。止。と。止。と。止。と。止。と。止。と。止。と。止。
諸神。し。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
雷鳴。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
六月十日。電光目。と。不。ら。ち。耳。と。に。ひ。き。二人の
お。と。走。る。と。走。る。と。走。る。と。走。る。と。走。る。と。走。る。と。
勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。勝。と。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。
か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。か。

形のうす。夜の雷と雨と雪と
とくらべて、おもむきの市のうす。
ひづれと月と、そぞろとくらべて

○才立三章 あぐり傳ふ雪夜

六月中旬ノ風入羽林ノ事候セリ。秋林ノふきノからみ
をすま。ほゞさびしき。城ノうだらとすまつて、
あそびたるふうでありける。奥院十二坊。中院十四坊
宝光院十七坊。合々一千三百三院あり。中院比丘尼寺
女人禁制ノ寺宇也。だらうてあり。春秋のうじ
小九頭龍王のまゝうらり。毛と筋の腐れ様
ぬまへ九頭龍王のまゝうらり。人間の

○走山は第卷之四

○六

いそんがうく。絶粒後ハ一ヶ月アラスの後、伏木と附
着す。かく夜と外と物と飯と。洋服御用と是と
是の内津ふゆるふ。一粒ものふくら。やくさう。又
氣乞の人ありて。糸と縫て糸と食せよと。糸
糸の糸もどもゆうへうす生糸うて。いつまでもく
糸締ハ結の糸をうるこりて。はね糸のうるこりて。然すのふ
糸締もあはれほのうるこりて。はね糸のうるこりて。北方東北の糸
糸のうるこりて。はね糸のうるこりて。はね糸のうるこりて。
より。絶頂ふゆるて。六月初もと。七月中旬まで
うちのうるこりて。はね糸のうるこりて。八月と
九月。かく年が。奥院の大口が嵩とて、

あり。せうふ洋二十ニナリ。又里り。あけ。ば。小津
ソナレ。島の邊に。浦。有。徑。で。又。ア。中。ツ。モ。本。道。
レ。け。ア。リ。手。に。水。一。湯。ナ。レ。ア。レ。叶。此。之。の
ア。ラ。マ。ナ。レ。一。面。水。厚。ア。清。水。と。ア。シ。ダ。ミ。ラ。ユ。け
水。飲。ん。と。ア。付。ハ。ア。ド。ア。モ。ア。ラ。ル。花。矛。ト。ア。ム。け。ホ。ト
ア。ク。ア。レ。ノ。手。ナ。レ。モ。手。ナ。レ。モ。手。ナ。レ。モ。
ア。ハ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。ア。レ。
漢。水。と。ア。ラ。ム。ア。ラ。ム。ア。ラ。ム。ア。ラ。ム。ア。ラ。ム。
モ。捕。リ。キ。シ。フ。ス。ル。水。と。ア。リ。モ。一。人。お。原。バ。ス。出。来。
ぐ。左。ノ。手。ア。ハ。捕。リ。ト。ア。タ。テ。も。と。汲。リ。ム。是。モ。ど。ア。
○志山後篇卷之四

○七

セ。ギ。ラ。ラ。ラ。手。ア。ス。バ。ア。又。ア。ラ。リ。我。服。ト。ほ。レ。手。に
手。ア。リ。ア。ラ。ク。食。粉。ア。ハ。シ。タ。ト。ア。ツ。ヘ。ア。ラ。ム。ア。ヨ。バ。
モ。ア。モ。付。乾。ト。モ。シ。ト。ア。ケ。の。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ス。里。の。る。休。跡。ア。ア。モ。ア。ナ。レ。ア。モ。七。里。ア。被。御。ア。
取。跡。ア。モ。ア。セ。里。ね。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。
ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。ア。モ。

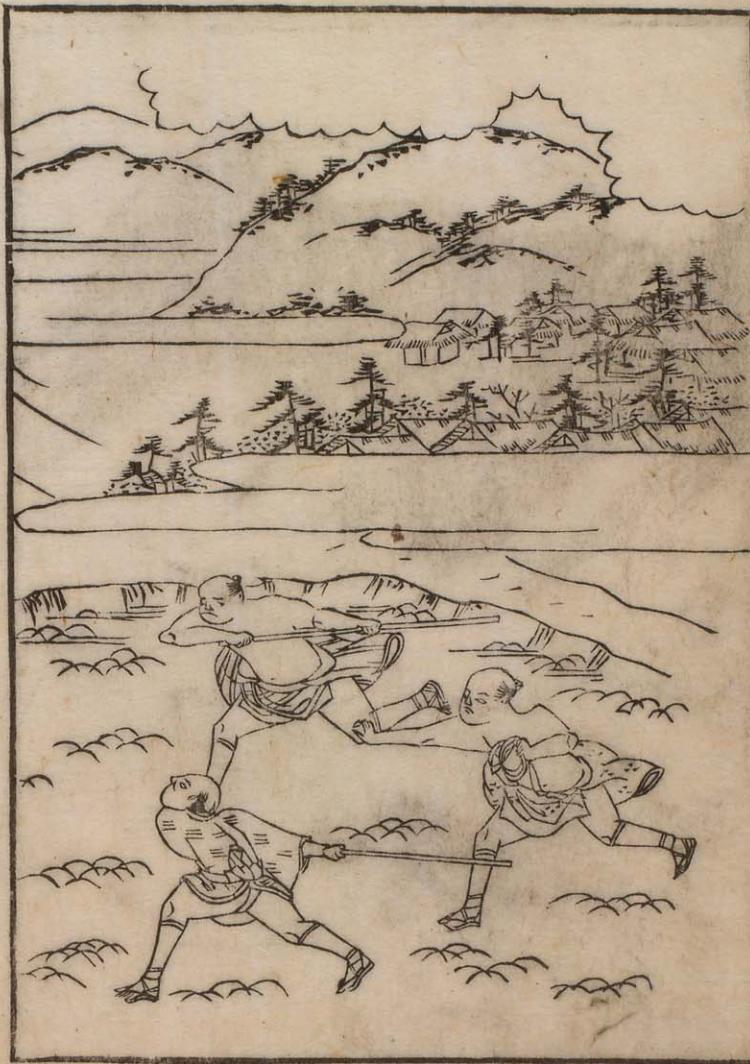
勢へりつと、やつぶた口が等す。衣佛の全體あ
郊の大口ニモうり。不^レと、アリ。有ひぬ。凡て四人
小^シまく。モキ本^レ。レガタマ^レ。大^シはう。也。齋岩さに
く。ギリ^レ人の事^ア。ちよ^レ。おも^レ。うふ。考す。ふ
考^シふく^シ。アシ^シ。ニモとおも^レ。あらび。だまし。と
き。アシ^シ。留^シ。おつ^シ。伝^シ。と。あらゆ。付^シ。事^ア
も^シ。アハ^シ。傳^シ。と。モ^シ。も^シ。付^シ。け^シ。か^シ。
う^シ。アハ^シ。傳^シ。と。モ^シ。も^シ。付^シ。け^シ。か^シ。
ト^シ。アハ^シ。傳^シ。と。モ^シ。も^シ。付^シ。け^シ。か^シ。
ト^シ。アハ^シ。傳^シ。と。モ^シ。も^シ。付^シ。け^シ。か^シ。
ト^シ。アハ^シ。傳^シ。と。モ^シ。も^シ。付^シ。け^シ。か^シ。

○三山屋の木之田

〇八

魚^{アシ}へ^シと朝日^{アシ}アリ。ふ^シえ^シのや。せの^シ。アシ。山
中^シの^シ。アシ。金^シの光^シ。アシ。と^シ。木^シ。アシ。アシ。アシ。
アシ。祿^シ定^シアシ。アシ。ふ^シと^シ。アシ。アシ。アシ。アシ。
布^シた^シ。アシ。アシ。アシ。山^シ。アシ。人^シ。アシ。アシ。アシ。
妖^シ賊^シ捕^シ。アシ。民^シの害^シと^シ。アシ。アシ。アシ。
田^シレ^シ。阿^シ。と^シ。阿^シ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。
アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。
アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。
御^シ川^シ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。アシ。

すでふちのまゝまきはく記に今は既無
もじわふるば。すくる雪ふうて。ふきうるも。雪ふ
もんば。ひづれまきて。暮らうば。さるのわくまで。日
もくまづく。雪まふやまわくと。さくまで。きざり
ぬうへゆる。すくい。小川まぐりて。渴ふのく水
とねん。あど。小川まぐりて。水とくくば。やもしろが
致痛。身体とくまく。やうへうらう。辛たる
こと。今朝の。なれば。中。喉嚨をじ。ほうへ
さく。うば。便えを。もあく。ん。かくまく。も。冥々
のまく。さく。ほし。



○寺二十三章

うる血の心とく

ほくのまごのキラリトモロシハ同ひにそ候
す。やうも。かく天とく。後陽子をうなぐ
シム。やうやう。かく。是の日も。もやうる
てあらじ。まくまく。ける。森へたキラリ

やうな。まくまく。の。うまく。とく。やま
いが。まくまく。の。うまく。とく。やま
けの。くとく。はる。疏葉にして。つぶ爛う。疏
葉の勢ある。づれ。まも。孝ふしゆ。後頂の大坑。下
烟うちの。が。ハ硫葉の。坑の廣。九三百。坑の中に。硫葉滿

時ひだり大寒多き。大石引ぐる。砾石とすれども
アサヒ葉とす。もよお石す。水す。ナメモサシシテシム
○近ごろ大寒ニ年七月小け山燒きす。はす。山脚
焼升ほす。人あり崩し。大石ありから。石す。水す。砾石
の雷の音す。人あり崩し。石す。水す。砾石
皆ひ陽ふ。火をもさへねば。人ありト。火をも
ふなき。火をもさへねば。人ありト。火をも
ふなき。火をもさへねば。人ありト。火をも
かゝて。火も燒く。火もさへねば。半そよぎ
てえくる。火のすゞか。火も燒せば。葉の里に生の
もうち火。火も燒く。火もさへねば。葉の里に生の
奇うる。年中け山烟とれば。火も葉ふ。お
うふも。火も葉ふ。例年四月火ふつまつ。火も葉ふ
○毛山はる巻之四

○十一

火もよし。火もと熱疾あつて。火坑。火と
火もよし。熱疾と集ふ。火のるや砂。燒く。燒く。
火もよし。燒け。火もよし。火と紙が色變
あれ。火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。
火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。
漢の中。血のぬれ。血のぬれ。流れ。漢川と。傷川
ノ。焼石。火もよし。流れ。火もよし。火もよし。火のじる。火のじる。
火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。
火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。
火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。火もよし。

大うる時のを後とせまへ。ちくらうううううううの
色あくして。ぶ血の。福よ。歌ふ。ふきとす
りて御く村とかとて又名の。うふ血の。ひとかく
白烟の。ぐれに立たうじ。石も。見へ一よ。あらわ
ふそー。圓完うふ。人の。サトの。ほく。ほく。よ
斗ふする。庵ひやく。モ。烟。まかう。今と。うざつ
えらむ。とくせば。モ。も。う。血の。術と。用。ぬ
やう。う。モ。と。行。モ。鐵。う。く

○まごの。微。と。お。か。ん。ふ。津。ま。の。う。は。の
様。よ。と。お。く。う。く。と。様。ふ。く。の。寺。め。う。く。と

○三山は筋巻之四

○十二終

改。手。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。す。
靈。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

遠山寺稿

遠山寺稿後編

國

續編

都寺稿とちのまつはるにうつて年うつて
キモチアリ無生を極め 累令部四冊

あ箇の春新稿集

全部四冊

大作を在り 番号をもつて水が後づくと多くい

亨和元年辛酉三月發行

寺町六角有角

著者 恵物

寺町二条次町

著者 宗八

平安書林

寺町二条次町

著者 利秀